

## 秋口対策 ～豚胸膜肺炎とマイコプラズマ肺炎～

今回は、ワクチン運用の視点から秋口対策について考えてみました。

秋口には呼吸器病を中心に病気が多発します。なぜこの時期に病気が起こるのでしょうか？何となく朝晩冷え込むからとわかっているのですが、1日の最高気温と最低気温の温度差を日較差(図1)と呼びます。夏場に比べて秋口は確かにこの日較差が大きくなります。近年の温暖化の影響で、最高気温も最低気温も上昇傾向です。しかも、最高気温の上昇よりも最低気温の上昇の方が激しいそうです。そう言えば、私が日生研に入社した頃(35年ほど前)には屋外に置いた踏み込み槽の消毒液が完全結氷していましたが、今では凍ることも稀になってしまいました。また、日較差は海に近いほど小さく、遠いほど大きくなります。従って、内陸部あるいは山間部の農場では日較差が他より大きいことを覚悟しなければなりません。

日較差だけを比較すると春先の方が大きいのですが、疾病は秋の方が多く出るようです。これは、暖冷房機器のエネルギーの使用量を参照すると、暖房機器の方が多くのエネルギーを必要とします。同じような理由で、豚も自身の体のホメオスタシス(恒常性)を保つために自律神経系を用いて懸命に体温を保とうとしますので、秋口のストレスが大きいと考えられます。

ストレスが高まると疾病発症の危険度が増すことは、皆さんもよくご存知のストレスバケツ(図2次頁参照)の説明からも明らかです。そこで、この時期にその対策を講じておきたいところです。当然、バケツ内の他のボールに対する対策として、最も大切な環境・衛生対策、飼養管理の適正化なども当然重要です。秋口になると、そこに日較差拡大のストレスが加わってきます。バケツに余裕があれば良いのですが、ぎりぎりですとこの時期にあふれ出し、何らかの疾病が発症することになります。そこで今回は、ワクチン注射でできる秋口対策をご紹介します。

まず、秋口に発症しやすい疾病は豚胸膜肺炎と呼ばれるアクチノバシラス・ブルクニューモニアエ(Ap)感染症でしょう。本感染症は、Apが常在化している農場でも、季候の良い時期に豚の健康状態が良好で、あまり臨床症状が認められないケースがあります。この場合、発育成績への影響があります(図3 a次頁参照)。しかし、朝晩冷え込んで、さらにカーテン操作を誤ったりすると、とたんに本病を発症します。こうしたケースではAp関連抗体を検査してみると肥育期に抗体が警報レベルではないにしても比較的高いことが多いようです(図3 b次頁参照)。ストレスバケツに余裕のある農場では夏季の検査でも抗体レベルは低く維持されています。しかし、上述したような管理ミスがあったりしますと突如として本病の激しい発生をみる場合があります。

こうした事態を回避する目的で、この期間にAp感染症対策ワクチン(日生研豚AP125RX=Ap<sub>x</sub>、日生研APM不活化ワクチン=APM)の運用をお勧めします。通年で使用でない場合はこの時期からがチャンスです。農場のAp清浄化を目指すなら今から通年使用を始めましょう。未使用の場合は初回30～60日齢、第2回は60～90日齢の範囲で検討しましょう。現在使用中であれば、時期が適切かどうか例年の好発時期や直近の検査成績など様々なデータを元に再検討しましょう。

ここでもう一つ重要なのが、混合感染している可能性のある疾病です。特に重要なのはPRRS、PCV2及びマイコプラズマ肺炎(Mh)です。PRRS陽性農場では何時動くかを掌握しておく必要があります。それが衛生管理上の努力により安定していることが重要です。PCV2は適切なワクチン使用により有効性が十分に発揮されて、野中毒が動かないことがポイントです。

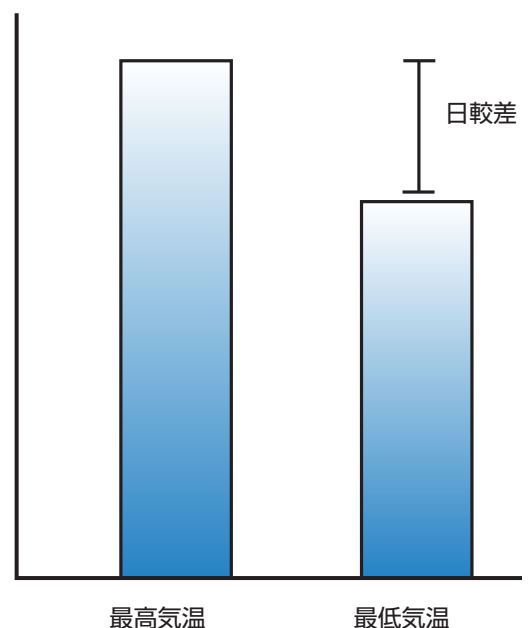


図1

今回問題にしたいのはMhです。通常、肥育豚の100日齢前後で抗体の上昇を認めますが、十分コントロールされていない(図4)と秋口にストレスバケツからApと一緒にこぼれ落ちることになります。そこで提案したいのがMh対策用ワクチンの2回注射です。ワンショットワクチンを販売するメーカーさんも本病対策ワクチンについては2回注射の方がパフォーマンスの高いことを示しています。日生研MPS不活化ワクチンやAPMを用いて打開策をご検討下さい。

農場の立地を含め疾病の状況が複雑で、一つの固定されたプログラムでは日本の養豚では役に立ちません。折角の機会ですので、それぞれの事情に合わせたワクチネーションプログラムをご提案したいと存じますので、弊社営業部員に是非お声かけ下さい。

日生研株式会社 営業部 0428-33-1009

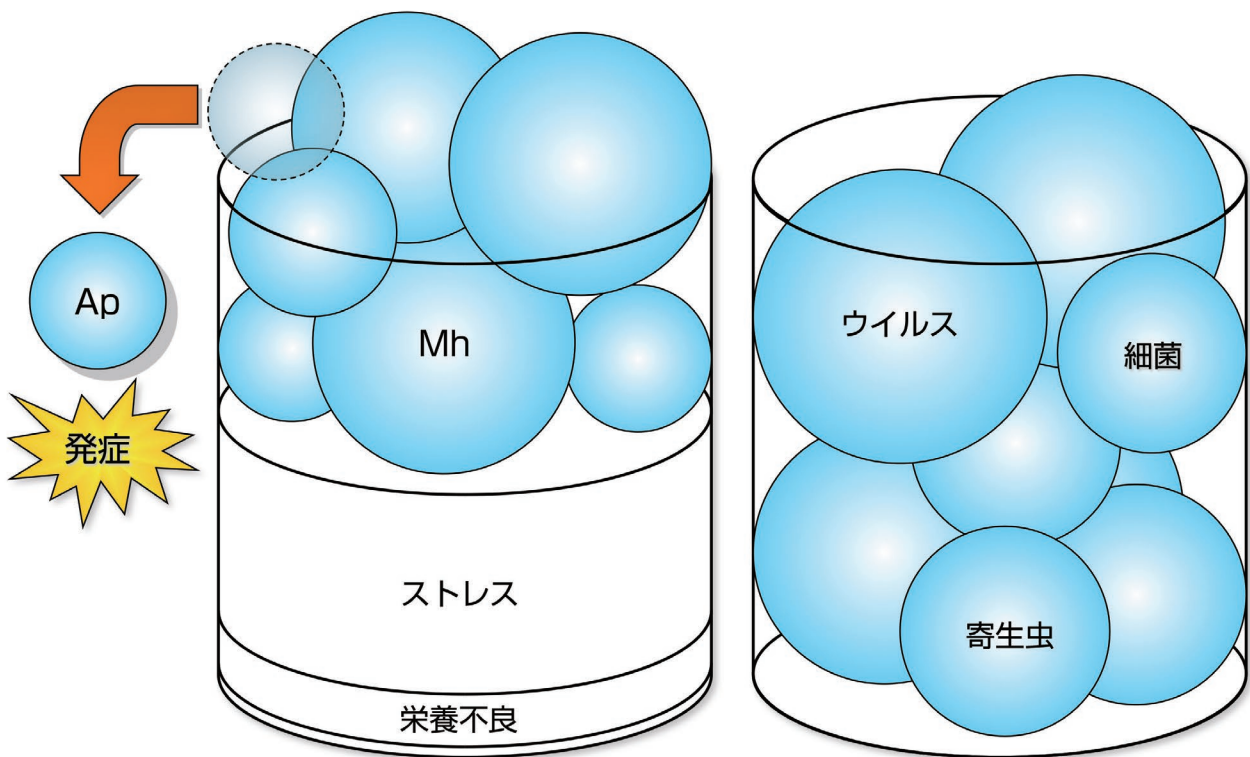


図2 ストレスバケツ

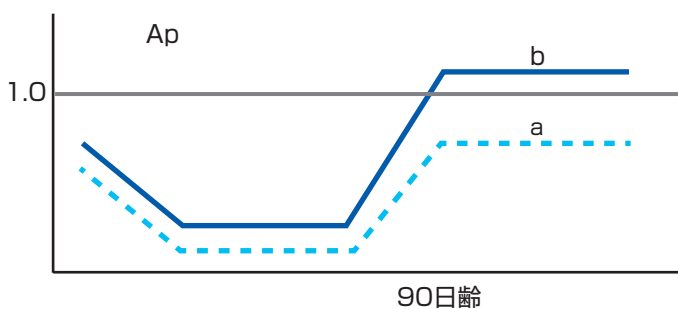


図3

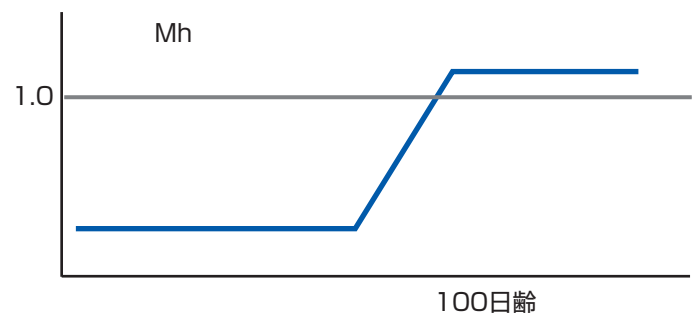


図4